

書評

グスタフ・ランダウアー
『革命』

Gustav Landauer, *Die Revolution*, 1907

恩 三 郎

ランダウアーが、この『革命』⁽¹⁾で語りかけていることは、何であらうか。それは、われわれが、共通精神を持たねばならぬ、ということだ。つまり、真の人間関係を、回復、あるいは創造せねばならぬのだ。と。この本は、いわゆる革命の理論を示しているのでもなく、革命の分析でもない。僅か百数十ページのなかで、古代アッシリアから十九世紀までの歴史を、一望の下に眺めているのだ。その眼は詩人の眼である。とはいえ、そのような断定は、不要なのかも知れず、ランダウアーには様々の名称、詩人、思想家、アナキスト、革命家、また、実存哲学者とあてはめる事が可能なのではないかと思うが、同時に、つまりは、一個の大きな個性であったと、人間と

いうものを、人間と人間の関係というものを、豊かな心で眺めてきた一個人性であった、と言うだけでいいのではないかと思う。

『革命』は堂々たる著作である。ぼくは残念ながら、彼の他の著書に未だ接していないが、この一冊だけからも、彼の確たる姿勢と、暖かい心が感じられる。その悠容たる重量感、ぼくに、ホイットマンを、ドストエフスキーを、ヘンリー・ミラーを、同系列の中に思い浮ばせるのであって、堂々と「人間」を真正面から論じるおらかさと力量を示しているのである。彼は、この『革命』のなかで、なにをなすべきか、どうすべきか、というようなことは、述べていない。太い筆致で、一気に、

歴史を描き出し、言外に、さあ、ぼくたち自身の存在を追求しようではないか、君と僕の関係について考えようではないか、と、ただそれだけを語っているのだ。

彼は、キリスト教中世が終つてから、今までを、同じ基盤の上に立つ時代とみる。つまり、大きく、それが革命の時代なのだ。百年やそこらの、諸々の現象の変化などに彼は捉われない。今が、いかなる時代であり、状況がどうだから、革命は、云々、などとしないのだ。おおらかに、行動するのは君自身なのだ、と語りかけているのだ。歴史は、現実、ぼく達自身のなかに在るのだ、と。もし彼を現実遊離、というようにみるなら、それは誤っている。彼は、人間、という揺ぎない存在の上に立っているのであり、それゆえに真に現実に対して眼を開いているのだ。この『革命』から伝わってくるランダウアーの息吹きは、限りない人間性への信頼であり、それは、人間の歴史を、永遠的なサイクルで眺められる彼の態度から生れてきているものであらう。真のオプティミズムがそこには在る。

しかし、生身の彼は、一九一九年五月二日ドイツ革命の流血のなかで、殺された。⁽²⁾

詩人の眼で眺め、詩人の言葉で語った彼を、一個の芸術家とみるなら、彼はその存在を一つの芸術作品として終らせたとと言えるだろう。彼が、このような形でその生涯を終らなければ、その思想や哲学は、もっと確たるものへと発展させられたことであろう。しかし、その面においては、彼の友人であり、またもつとも深き理解者として、イスラエルのマルチン・ブーバー⁽³⁾がいるので、ぼくたちはランダウアーの思索の流れをある程度までブーバーに追い求めることが可能であろう。ブーバーの著作「孤独と愛」(野口啓祐訳 創文社)に示されている。「われ」―「なんじ」―「われ」―「それ」という根源語の追求、ということを見る時、そこに、ランダウアーのこの「革命」と同質の流れを感じることができる。

ランダウアーは、ぼく達のいるこの時代を、文化は共通する基盤を喪失し、人間はバラバラな存在となっており、芸術家は民衆とのつながりをなくして孤立している時代と、とらえる。ランダウアーを、一個の思想家としてとらえるなら、彼は、こういう時代を眺め、そこに再び共通した基盤を創り出さねばならぬ、と叫んでいるわけ

だ。しかし同時に、彼の叫びは、孤立した芸術家のそれであって、彼の声は、どこまで響き渡ることができたであろうか。また更に、彼はその生命さえも、孤立した芸術家そのままだに、断たれてしまったのだ。彼は我々の時代の偉大な個性の姿を、身をもって示したのであるが、その孤立せざるをえないところから叫んだのは、真の人間関係の創造を、共通精神の回復を、ということであった。その点で、歴史を語るその言葉は、詩人の言葉であっても、彼はやはり思想家、あるいは哲学者であったと、ぼくはみたい。芸術家は、孤立したまま、その姿を究極まで追求するところから、新しい人間関係を獲得しようとするだろう。彼は、そういう追求の方向ではなく、人間という一般概念に、土台を置いているようにみえる。そこから、この「革命」には示されていないが、具体的な新しい社会建設ということも生れてくる。革命家としてのランダウアーが、そこに登場するのである。

だが、ぼくはこの面におけるランダウアーの思想については、何も知らない。また、「革命」の内容を要約、紹介することも、ぼくの手にあまる仕事である。詩人の声

は、直接耳にするしかなく、せめて一冊でも、彼の著作が邦訳されることを、ぼくは望む。

「キリスト教中世において、詩は、人の集まるところならどこでも、のびのびとその姿を現していた。教会に、市会に、広場の集會に、戦場に、仕事場に、城に、宮廷に。現在では、詩は、孤独のなか、つまり本のなかでのみ、生きている」

けれども、ぼく達が、彼、ランダウアーの語る言葉を受けとめる準備ができていたら、すなわち、「出合い」を可能にする心を有していたら、彼の言葉は、広場で朗読される詩文の姿を、再び取りうることでできるだろう。彼は、自分の言葉を、狭い書物の中に押し進めることは好まなかったに違いない。自由な広場の集會で語りたかったに違いない。その彼の願いを実現するには、まず、彼の言葉を、ぼくたちの母国語に移し変えるという作業が必要なのだ。それがなされていない、ということは、彼が述べているように、ぼく達がいかに、孤々バラバラな存在であるかの例証のようなものだ。

「芸術というものは、常に、ある一つの

時期が、時代の頂点に、文明の一つの頂点にあるか、ないかを知る、一つの指標になる。文化的に一つの頂点にある時、芸術は社会的であり、個人的ではない。一つの中の周りに集められ、統合されており、分散していない。それらは時代の、民衆のあらゆる代表であり、一方解体と、没落の時期には、芸術は、孤立した天才的な個人の作品であり、その重心は未来に、あるいは闇の中に身を隠した民衆のなかに在る」

「キリスト教中世における彫刻、絵画は、建物と密接に結びついていた。その時代の希望と富を代表する一つの建造物を構成していたのだ。この総合的な、そしてほとんど匿名の芸術とは反対に、我々の芸術は、時代の辺境に位置するところの才能をもった個々人が経験したところの希望として、特徴づけられる」

ぼくたちは、たしかに、総合的な文化、というようなものは、持っていないのである。「大衆文化」というような言葉が云々されても、それは文化と呼ぶにはあまりにもお粗末な、偽の現象でしかない。個有名詞の被せられない、無名的な形を有しているとしても、それは、民衆のかたまりであ

る無名ではなく、機構から発する、つまり、機械、資本、権力、そういうものの無名に他ならない。また伝統文化が、「伝統」ではないのは、まさに、ぼくたちは、伝統文化が、文化であったときと違う基盤の上にあることを示している。しかし人は、やはり伝統文化に惹かれるのであり、それは人間の関係が、一つの絆をもっていた時代への郷愁の現れなのかもしれない。

だがもちろん「伝統」のなかへのめり込み、そこから新しい原動力を引き出そうとする方向は、何物をも生み出さないであろう。江戸時代、浮世絵が版画という形式を持っていたのは、文化が共通の基盤を有していた、すぐれた例証であるが、現代において、絵を精巧なる印刷技術でもっていくら複写してみても、表面上の形は似ていても、浮世絵の版画の意義を持ちえない。また、共通のものの、民衆的なものの、全体的なもの、を無理に創り出そうとすると、それはイデオロギー上や、政治上から発せられることになり、それは芸術の破壊を意味するものでしかないことは、明らかであり、又その証拠は歴史が示している。ぼくたちが在るこの状態において、芸術があせ

つて一般的なものを持とうとすれば、それは迎合に陥り、決して共通的なものの創造とはならないだろう。

ぼくたちの時代の芸術は、この個人的な方向を、究極までつき進むしかなく、絵画は、抽象画となり、詩は難解なものとなるのは、当然のことなのだ。孤立した姿から、それは次第に共通の基盤をまた形成していくだろう。この共通の基盤の創造と、個としての人間の追求、個としての人間が追求する方向は、併行的になされていくだろう。

思想家として、あるいは革命家としてのランダウアーが、その孤立した姿から語るのには、「共通精神」である。彼はこれといかなる風に描いたのだろうか。いかにしてその獲得への方向を示唆したのであろうか。⁽⁵⁾彼はキリスト教中世の社会を高く評価しているが、もちろんそれへの復帰を考えたわけでもないし、またキリスト教に、精神の拠り所を求めるわけでもない。だが、彼の思索の展開のなかに、色濃く、ぼくは宗教的な色彩を感じる。宗教的な根をもたぬぼくには、どうしてもわけ入ることのできぬ柵が、そこに感じられるのである。

彼にはユダヤ人とドイツ人という二つの民族的伝統が重なり、その上に、ドイツロマン派の流れを汲み、その精神的な親類は、中世の神秘主義哲学者マイスター・エックハルト、更にノヴァリス、ゲーテ、スピノサにあるといわれている。また彼はブルードンに深く傾倒したといわれており、この「革命」のなかに、ブルードンの言葉が、二、三引用されている。このように彼の思想は、とても要約し得るようなものではなく、ただぼくにできるのは、詩人ランダウアーが語る言葉の所々を、心にとめおくことだけである。ランダウアーと「出会う」には、ぼくはまた早過ぎたという感もするのである。

(1) ぼくが読んだのは、スペイン語訳 (La Revolución. Buenos Aires, Proyeccion 社版, 1961) によってであり、オリジナルのドイツ語版については、マイクローフィルムに収められているのをみたのみである。

(2) 彼は一九一八年ドイツ革命に参加し、ミュンヘン共和評議会に加り、連合主義的な方向に導こうと努力したが、彼の主張は孤立していた、といわれている。

Aufrit zum Sozialismus, 1911, (社会主義への呼びかけ) の第二版の序文(一九一九年一月)で、「混沌がココにある。新しい運動、新しい発見が、我々に告げられている。諸精神は目覚め、魂は責任を知り、手は行動に従事している。革命によって再生(ルネサンス)が到来せんことを。我々が必要としているのはただ一つ、新しい人間なのだ! ……」と述べている。

(3) プーバーの他にランダウアーの研究者としては、昨年死亡したスエーデンのアナルコ・サンジカリスト、ヘルムート・リュディガーの名のみは知る。日本ではランダウアーの思想は少数の人々を除いてポピュラーなものではないようだが、ヨーロッパやラテン・アメリカでは、相当に知られているようである。

(4) 「革命」は、「社会学は一つの科学ではない。しかしたとえそうであったとしても、革命は、その特別の動因から、科学的には扱いきれない、という性質を持ち続けるだろう。」という言葉が始まっており、またユトピア (utopia) とトピア (topia) の定義づけなどもあり、ランダウアーの他の著作に接していないぼくには、彼の言葉の概念上からも把握し難いところが多い。

(5) 彼のいう「共通精神」とは、広い意味での「社会主義」ということであろう。そしてこの獲得は、歴史の段階や社会の状況というものに左右されるのではなく、民衆の心、行動そのものに懸っていると思われる。「社会主義は、人々がそれを欲する時、常に、いかなる時代にあっても可能である」。彼はこのような精神を重視するのであり、キリスト教中世の評価もそこからでくる。しかし彼は、共通精神の獲得を説くだけの啓蒙家でもなく、全軍に怒号する指揮者でもなく、一個の実存としてバリケードに立った革命家であった。

ある農本主義との論争

——高山慶太郎と「北緯五十度」

まえがき——これは、ここ三、四年かき綴っている「あるアナキズムの系譜」(詩誌によるアナキズム)のなかの「弾道について」の部分である。今日これを発表するのは、この論争が、戦前一九三〇年代初期のことでありながら、今日に至ってもなお考察に値するものを残していると見るからである。私自身の内部にもここに回想されている経験が、未解決、不徹底のまま放り出されており、戦後二十数年、反人民的に再回転する情勢の下で、もう一度回想を新しくしておくべき社会的文学的経験であると思われるからである。

かくのごとくにわれわれのかつての僚友たちは人道主義的善意のままに「民族の危機」の相言葉に招かれて戦争の非人間性に目をつぶることができた。そのことの悲劇的な経験にたいする再認識は、戦後といえども深く追及されたとはいえない。今では、肯定的に再出発の拠りどころを経験の上に探り求めるよりも、むしろ否定と不信をこそ典拠とすることのために、私はかつての「物語」的論争を紹介したいと思う。

この論争をよく知るために、次の二、三のことについて説明しておきたい。

「弾道」——一九三〇年—一九三二年に七冊を東京で刊行された代表的なアナキ系詩誌。——小野十三郎、秋山清編集。

「北緯五十度」——一九二九年—一九三五年に十二冊を北海道で刊行。更科源蔵、猪狩満直、真壁仁、渡辺茂らが同人。当時のアナキ系詩誌の一つ。

小野十三郎——大正末の「赤と黒」以来アナキスト詩人として活動、「弾道」の時代以後理論的な指導者の一人であった。

秋 山 清

その自伝「奇妙な本棚」(一九六四年刊)の第一部の「カアル・サンドバアグと出会う」のなかで、小野十三郎は「北緯五十度」と「弾道」との論争のことを思い出して次のようにかいた。

「猪狩や更科源蔵たちが、山形の真壁仁らを加えて、一つの地

方的、土俗的な精神で結ばれた北緯五十度という詩誌を刊行したとき、そこに載ったある詩を、わたしは弾道で「冗漫で甘い人道主義の見本」だと述べたことに端を発して、以後北緯五十度に拠る北方の詩人たちと、大体南方系と見てよい弾道の詩人たちの間で、双方の雑誌が出る度に、はげしい応酬がくりかえされることになった。こちらが甘いといえ、甘いとはなにごとか、オレたちは百姓で、東京で下宿などしている文学青年とはちがうんだ、という調子で、いまから考えると血の気が多すぎ、まともな論争とはいえぬものであったが、ずいぶんやり合った。そして、かれらの攻撃の一番の矢表に立ったのは、他ならぬ、かれらの詩の世界に一番先に近づき、それによって、自分の詩の体質改善をはかるうとしたわたしであったことは皮肉である。その点、しよっぱなから銅鑼や北緯五十度に結集している詩人たちに対して、強い異和感を持って動じるところがなかった秋山が、わが弾道の仲間では最も冷静で、したがって、当時、外部から同じアナ系と見られていたこの両誌の間で、かなり長期にわたってつづけられた論争の意味を、だれよりも前向きの姿勢で受けとめていたのではないかと思う。

だがこの小野の回想にはほんのすこしだが、記憶違いがある。最初に「弾道」誌上で「北緯五十度」を一からげにやつけたのは小野十三郎ではなく高山慶太郎であった。小野が「双方の雑誌が出る度に応酬した」といったことも事実とちがひ、「弾道」にはそれを含めて三度きりしか出ていない。はじめ第四号（一九三〇・八）に高山が「北緯五十度」の作品に触れて、

「更科君の、子供を連れ去られた母に、は何の感激もあたえな

今日に変わる意志を信じて俺は生きる。

〔君を送る詩〕渡辺茂

こんな風に仰々しく甘いのだ。しかし仲間だと思っている者からの気短かな批評にたいする彼らの猛烈だった反論、折にふれて私はもう一度それを読み返したいと思ひながら、戦災で雑誌が焼けてしまい、私のまわりには「北緯五十度」を持ったものがない。真壁仁に問い合わせたがはつきりした返事がなく、北海道に帰る知人にたのんで渡辺茂にも尋ねてもらったが保存していないとのことだった。

最初「北緯五十度」の詩の批評を書いたのは高山慶太郎であったのに、いつの間にか自分がかいたと思ひこむほど小野十三郎もこのことは心にひっかかっていたらしい。終戦翌年（一九四六）の「コスモス」第三号に彼がかいた「農村のことども」という詩のおわり

ヒューマニズム。それがどうした！

東北の或る百姓の詩人と応酬したことがあった。

十五年前も昔になるか。

とあるのを見て、なるほどと思ったことがあった。私達二人がそんな思いを残す「弾道」と「北緯五十度」との論争を見ることはもう絶望かと思つたそのガリ版雑誌が、一昨年（一九六五）四月に死んだ伊藤和のための小さな集りの時、彼の残したものの中にあることがわかった。四冊（第四、五、七、八号）あって、そこに「弾道」と

い。主題にたいして、人類の負うこの痛手、なんて文句が事大主義だ。——この「北緯五十度」全誌にあるあきたりなきは冗漫の二語につくる。もっと、どんと来い、そうしたものが書けないとしたら、君達はあるふれた甘い人道主義者だ」

と書き、それにたいして「北緯五十度」側から幾たびかはげしい非難があり、それにたいして「弾道」では「北緯五十度の仲間へ」（第六号、高山慶太郎）一回きりの応酬であった。高山のはじめの批評は「北緯五十度」が腹を立てそうな難ない方だったかも知れぬが、高山にそう言われるだけの甘ったれが彼らや、彼らと同傾向の、当時アナ系といわれていた二、三の雑誌には可成にひどかった。たとえば「北緯五十度」（第四号）の

どうしている

夜毎に聞える凄惨な海鳴が

あの夜、君が涙の顔を埋めた

せつない孤独の胸をいやにかきむしる

いくぢなくも 滲む涙！

俺はぐつと喰いちぎっている

要故に闘わねばならない

闘い故に別れなければならなかった必然な自負をがっちりと感じるいま

かぎりなき寂寥に身を裂かるとも

泣いてならぬ時に、何で泣く

たとえ ベットリと血に塗られても

高山慶太郎を非難する四つの文章があった。

抗弁——批評子高山君へ 猪狩満直（第四号）

俺は言う 更科源蔵（第四号）

阿寒よ燃えろ 坂本七郎（第五号）

僕達への断片的覚帳 渡辺茂（第五号）

この他、第六号に真壁仁の「古潭よ燃えろ」があったこともわかった。猪狩の「抗弁」が反論の第一発であった。

「高山君、僕たちは果して君の言うように冗漫の二語につくるところの生活をしているか、少くとも僕達各々は真面目に生きているつもりである。そしてその生活の中から産み出した詩、詩誌、それがはたして冗漫の二語につくる代物であるか、あったか、僕は断じて君にそう言わないのである。

いったい僕たちの雑誌にたいして冗漫とは何であるのか。また君達のありふれた人道主義者、とは何であるか。どこが冗漫か、僕達がふざけながら日々を生活しているものであるか。ふざけながら物をいい、物を書き、ふざけながら雑誌を出しているかは、真面目に読んでくれたらすぐわかるはずだし、また断じてかかる君の如き的はずれた悪評は下さないはずだと思う。——

失礼な話だが僕たちから見るとかかる悪評は真剣な生活をしている人が書いたとはどうしても思えないのだ。どっか下宿の二階にでもねころがっていてブカブカ煙草をでもふかしながら文芸家然として威張っている人間が書いたものだと思えないのだ。

兎角、高山君、君はまだ卵の殻がけつにひっついていてるよ、甘い辛いというガラじゃないよ、もっと大きくなってアブとハチと

のみわけがつくようになってから物を言ってくれ給え。僕達は、ナルキシズムイデオロギー、なんのcanのとしめんどいなことはあまりよくわかっておらない、だがわれわれの文芸とはたぶん君が思っているであろうように、そんなせまぐらしい、きゅうくつなもののじゃなからうと思う。アナルキシズムの精神に反していない限り、人間的なあらゆるものを包含し内蔵してさしつかえないではないか。——引合に出すのは妥当ではないかも知れぬが、坂本（道）君の「タンポポ」や木山捷平君の「野」や有馬君の「駄ん馬」や草野君の「第百階級」を君に評させたら何んと言うか。——これらの詩集も君にいわせれば矢張り冗漫の二語につきた代物か」（「抗弁」猪狩満直）

「吾々のたとい鼻紙に黒く刷ったきたない雑誌でも、味や遊びで苦しんでやっていない以上、冗漫の二語につきる評をもつて一蹴しようとするにはあまりに吾々が骨が固すぎるかも知れない。高山君は何を尺度として吾々を評されたのかは知らない。僕たちはあまりに理屈というものを知らない。そんな認識不足なことよりも、ピンピンぶつかって来る生きた毎日があるからだ。——根の土についていない理屈なんかヘドのようなものだ。兎に角だ、冗漫の二語につきる雑誌なんかバルナツシアンの中のものにでもあればあるか？」

大体高山君はアナキストの詩というものは大砲でもひっぱって歩くような詩でなければダメだというのか。巨弾をぶつぱす、でかい大砲をグワグワ引っぱって歩けばなるはずばらしいだろう。糞をつけた牛馬や野菜を積んで前のめりになって引っぱって来る荷車はあまりみすばらしく、それを引っぱっている奴は

あまり無気力で弱々しく気を引かない。——百台の大砲より百台の荷車が、より吾々に切実である事はわかりきったことではないか。

——ルンペンよ、北海道へ来い、北海道へ、吹雪ってどんなものか、煙草の煙に煤けた面を向けて見ろ、甘い、辛い、泣くにも泣けない奴が、どうして切るものを切るか、それでもウソといい得るか」（「俺は言う」更科源蔵）

また第四号の後記には「こんどはどうか、これも冗漫の二語につきると横に割けた口で言えるか」ともあった。しかし引用した詩と同じく猪狩、更科の反論にも高山が指摘した甘さは共通している。猪狩のいう「真剣な生活」、更科の「北海道へ来い」には、自分らの生活だけが真摯で本物だといわんばかりの倒錯的な被害者意識、劣等感と反社会的な心情、甘さも冗漫さもそこからこそ生まれてくる。何故そうなのか、それを考えるためにはもっとその他の反論も見る必要がある。

第五号では坂本七郎が「阿寒よ、燃えろ」を書いて彼らに加担し、渡辺茂も書き、編集後記には「四号の俺達の腹の底のうなりが本当の友を多く引合わしてくれた。——坂本、竹内の同志も新しく加わって吹雪に向う北の陣はいよいよ固い、坂本がまた鋭い切先を弾道評に向けて——」とある。猪狩、更科のいきり立つ反論よりも、坂本の論駁の骨子は理解しやすく、そして彼らしく熱っぽい語調だった。

「私は北方人に、今は爆発を希望する。無礼か、不信か、虚悪があるのだ。弾道八月号の高山君の「北緯五十度」の批評がそれだ。——その言葉はガマン強い北の生活者を侮辱するに充分であ

らう。私はかかる皮相浅薄な軽卒な言葉を吐く人間のその思い上がった傲岸さに隣れみを感じる。一作品主義者の重心から外れた批評として、黙殺こそ唯一の寛大だと思つたが、弾道は仲間の雑誌として自他共に任ずるものだ。その仲間うちに、かかる不信の人間が平然とのさばる事は黙視できない。評者は、アナキストを自称する人間であろう。もしくは芸術家的アナキストであろう。作品偏重の技巧至上の、まるで正しい視力をもたない、文学の使徒に狂奔する文学癡癡であろう。だが癡癡であろうと似而非であろうと私は断じて容赦できない。私は食らいつくであらう。「北緯五十度」の何処が冗漫か！ 冗漫とはだらしないことの謂だ。「北緯五十度」は断じて冗漫ではない。ギンと張り切った弓だ。

——猪狩君の作品、評者（高山）は面白いという。お気に召して猪狩満直光栄だ。題材が特異だという。——どん底が奈落が貧困が特異の故に面白いのか。猪狩の血豆の掌で書いた炭坑長屋物語が「文学」にされている。否、炭坑に喘ぐ苦悶する数十人が見世物扱いされている！ 胸を割く血の事実が似非アナキストの興味を買う。評者にいう、君は詩から何を要求するのか。文学的昂奮か、重ねて問う、君はわれわれの詩が何たるかを知っているのか？——君のこの観念は題材をイデオロギーで田楽刺にして作品を書いて解放運動と心得るボルとどこがちがうのだ」（阿寒よ、燃えろ）坂本七郎

まったく相つぐはげしい反撃であった。ところでこの論難をひきおこした批評の筆者高山慶太郎とは、一九二九年ごろから文学以外の場で私が用いたペンネームの一つである。戦時中の二、三の著書（日本の木、南の木「チークの話」南方の林業」等）もそうだったし、

日本アナキスト連盟の機関紙などに高山はいまも健在で、戦後の文人名簿には「秋山清、本名高山慶太郎」という行きすぎた記述さえあつたくらいである。「弾道」誌上では同一人の名が幾つも並ぶことを避けて、北山痛蔵（章野）、中島武二（萩原）、三宅哲三、陸進、岡見順一郎（小野）、和田松夫（岡本）、直方十郎、高山慶太郎（秋山）などが用いられることがしばしばあった。

論争の種を蒔いた私が、「北緯五十度」から高山慶太郎に向ける相次ぐ攻撃に応答しなかったのは、彼等の攻撃が、反論する気にもなれないほどに遠いものに見えたからだ。彼らとのあいだに横たわっている距離、説いてそれを埋めるよりも手を束ねて見送ることの方が当然の態度ではないかとさえ思つたくらいだ。私は易きについたのかもしれなかったが、気に食わぬのは（彼らの反論の、反論の態をなさざること）彼らの揃いも揃った農本主義的独りよがりと思ひ上りだ。「しちめんどやなアナキズムのことはよくわからない」とか、「理屈というものをよく知らない」とか、同志だとか、鉢の頭だとか、よくもこうまで無知をひけらかして思いあがつたものだ。私に自分がアナキストだと胸を張って言える自信があつたからではなく、彼らには知ることにも実践にも、前に向って進む者の自戒と謙遜と必要不可欠な努力が見えなかったのだ。安住し安逸して現状に甘えている彼ら。仲間だと思つていた彼ら、だから親近感に黒い疑問符をつけて見直した彼ら、その自信のない独善癖が私をまったくくがつかりさせた。彼らはアナキズムにも生活にも実践にもまるで疑問がない。だが詩の雑誌の同人を同志などと呼んでいい気になっている。同志など何をもってた易く呼べるのか。私の思いはこのような仲間たち、詩だけの同志に疑問だらけになった。

「北緯五十度」の反論(?)の全体から気付いたのは、彼らは自分を働く者といひ、それだから貧しく正しいのだという、その自覚とはうらはらの思い上りだった。彼等の仲間の一人の開拓農民の生活は苦しかったろう。だが都会のオレたちよりも「北緯五十度」の同人たちが貧苦だったのか。北海道、東北、それが何だ、という私の思い上りもあった。北方寒地の百姓ということを超え的条件(アナキストとして、詩人として)と思ひこんでいるらしいそのひよりより、それを甘い人道主義だといつてのけたのは、まだ親近感に立っていただけだ。自分らの善意のみを過大評価して現状維持に堕し、破壊的叛逆的精神などどこにもあるとは見えない。百姓生活と地方生活への心理的安住、仲間うちだけで紙めあっているみたいな、批評に批評をもつて応答できぬ前近代性がやりきれなかった。しかしそれを適確に指摘し解説して、革命家的口吻さえもらしかなないこの人道主義的な現実肯定者たちに強く現実否定の思想を吹きこむ力は私にはなかった。しかし「北緯五十度」に向けた私の批判とわれわれに返された非難について小野十三郎と特に話し合った記憶すらない。互に自明のこととしていたからだろう。

私は戦後も十六、七年たつてから、岩手県の「微塵」というガリ版雑誌に原稿を求められたとき、思い出してザッと次のように書いたことがある。

「彼ら(北緯五十度)は、自由主義であること、観念的な思想でなく現実的生活的であること、において百姓の立場を主張したのである。搾取者ではない、生産者である、権力主義でない、自主的である、等々の上に立って農本主義的である、といわねばならない。『北緯五十度』にはあつたとおもう。」

——この時の論争の中味には「政治と文学」の問題の、昭和アナキズム版的スタイルもあつた。即ち絶対の自主性の農民的主張には排他的な面が押出されて、形態の異なる他のコミュニティとの連合、連帯を理解しない(であろう)という危惧が消えない。当時は都市と農村の対立とか、都会が農村を搾取するとかいった皮相な意見もあつた。農村自治連盟などとはちがつて文学的だった主張の中味はそうちがわず、そして農民的社会実践においては文学青年らしくはるかに劣つて見えた。そのことを証明するのは昭和十年以後のアナキズム運動解体の時期に、逸早くヒューマニズムを喪失して、愛国主義へ急傾斜してゆくことの妨げとなるべき何も残してはいなかったことだ。

高村光太郎はこれら農本主義的詩人たちのアイドルであつた。それは更科、真壁らの、戦時下の高村への打込み方を見ればはつきりする。高村は草野を通じて「銅鑼」「学校」「歷程」につながり、「北緯五十度」等の日本の農本主義詩人につながり、また天皇国家の家父長的観念に従ふことによってあの戦争を正義のたかひとみることができた。北緯五十度の詩人たちは、百姓は(百姓だけが)犠牲者だという考えに立とうとしていた。裏がえせば犠牲者はすでに正しいのである。詩のよしあしをひっくり返して批判するべき何もない。まして都会の詩人などに。この百姓的優越感論理的なものではなく、感情的、情緒的で、むしろ都会への劣等感につながっていた。

われわれの描くユートピアは以前ただ何となく農村的であつた。戦後の日本農村には機械が入りこんで来た。都会は農村に侵入しつつある。ユートピアの姿は変化する。昭和はじめ都会が農

村を搾取すると見た時期も、現在も、農村——農民を搾取する者は資本主義である。——ほんの近い過去に農本主義的詩人の一群がいて、自主的であつたらしい日本の民衆を代表すると自負したが、その自負がそのままに侵略と戦争を是認し追従し、自主も自治も、自由も忘れて省みなかった。あの出発の分れば、批判を批判として受けとらなかつたわずかな差だが、その行きついたところは日本の誤謬にそのままつながつた。はるかに私はあの頃の、威勢のよかつた農村詩人たちを回想する。彼らの生き残つた者はどこへ行つたか。いま彼らは日本のどこかにいる。いまこそ日本の農村の自主自治を叫ぶときではないか。強大国の属国化した日本のために。はるかな私の友人たちよ! (一九六二、九)

この戦後の私の一文を見たらしく小野は「奇妙な本棚」のなかで「詩と農本主義についての気ままな回想」と題した秋山のエッセイを読んで、三十五年昔に、北緯五十度と弾道の間でくり返された反論の応酬に今日的な新しい照明をあてて、農本主義的なエゴイズムのその後の行方を追つていた秋山の潔癖さと執念深さに目を見張つた」と書いていたが、執念などといわれると小っぱずかしい。私の友人たち(北緯五十度)の同志たち)があの戦争の時期に急変転することが理解しがたい寂寥さで私をとらえ、私の動揺や不安とは対象的に転々移行していったその人々のことを忘れず、論争時点での、思想的拠点「アナキズム」が彼我において同質でなかったのではないかという疑惑に途惑いつづけていたにすぎない。

この「北緯五十度」との論争、詩の問題としての食いちがいに、文学と生活の問題をひっくり返して明確な決着をつけたのは「弾道」第六号の高山慶太郎の「北緯五十度の仲間へ」であつた。だがこの

高山慶太郎は今度は私ではなく小野十三郎であつた。(つまりこの論争の「弾道」側、即ち高山は、局清・秋山清と小野十三郎だったのである。)そしてそれは「北緯五十度」のもっともすぐれた詩人猪狩満直宛の手紙の形式で書かれていた。

「君たちの激しい抗弁を読み終つた、これから僕が云おうとすることは弁解ではない、逆襲だ。僕は不断冷静な客観的な立場というものを持ち合せていない。カットもしのぼせもする。しかし出鱈目はいいない。僕があれを書いたときの気持は正しく「北緯五十度」に対するあきたりなきは冗漫の二語につきる」と云いあらわされたのである。——これはどっかの下宿の二階にでもねころがつてプカプカ煙草をふかすことや裏の畑で燕麦を刈り取ることは、いささかも関連を持たない問題である。僕は君たちの激しい苦しい生活を知っている。何処の世界にふざけながら日々を生きている奴がいるか。

君たちがこちらに出て来て僕らと握手する。酒を呑む。話す。別れる。なんだ東京の奴はみんな遊んでやがる。詩人なんかくだらない。——これで僕らの生活そのものに対して断案を下した気でいたらそれこそんでもない間違いだ。人生に対する誠実、戦いはそんなところでまごついてはいない。十歩も二十歩も先をいっている。そこに「冗漫」と「冗漫でないもの」が生きているのだ。そこにほんとうの批評があるのだ。酷評が前からぶつつかかり、悪評が君たちの頭上に落下するのだ。

何処が冗漫か。君たちは歯を食いしばってきりぎりすところまで生きている。僕はその君たちの生活を、冗漫の二語につきるなどといつてはいない。早合点はいけない。東京や内地の仲間がつけ

に君たちから鞭うたれている点は実に君たちの生活に対する真面目さであったのだ。しかし、だからといってその生活のなから生み出された詩、詩誌が、「冗漫の二語につきる」場合もあり得るのだ。その場合とは？ 詩について云おう。

一、現実の把握に弛みが生じるとき。即ちマンネリズムだ。

一、個人の生活感情や意識が時代の動きから離れる場合、即ち認識の不足、社会的関心の欠如。

一、思想に対する潔癖性の喪失。これは感性をたちまち墮落させる。

以上の諸原因は僕らの生活、仕事、芸術作品に冗漫なる何物かを持込むに充分である。

——諸君は昔の誠実さを失わなかった。同時にやや泣虫の心臓も元のままだ。そして諸君はあまりに語らないにもかかわらず僕らよりはるかに饒舌である。

我々は前へだ！ 君たちも前へ！ だ。高山の馬鹿野郎でも何でもかまわぬ。僕は百度でもいう。「北緯五十度に対するあきたらなさは冗漫の二語につきる」と。

高山慶太郎（秋山清）のやや向う見ずな評言に対する非文学的な「北緯五十度」の反論、それについて高山慶太郎（小野十三郎）の情理備わったともいべき文学的逆襲だった。しかし「北緯五十度」の詩人たちの農民的土俗的エゴイズムの中には、アナキズムと質的に距たる何ものかが混入していた。だから、この小野の反論がどのように彼らに理解されたかには疑問が残った。

この高山（小野）の反論を掲載した第六号から半年ほどして出た第七号（終刊）に彼はもう一度「北緯五十度」に向けて「作品価値

論」と題する批判を小野十三郎の名でかいたが、今度は痛烈の度合がずっとはげしかった。

「北海道の詩誌『北緯五十度』の諸作品に対してなされた高山の批評は、はからずも同グループ内に果喰っていた一部思想的純分子の存在を摘発する口火となった。思想的あいまいさはただちに彼等の芸術に対する態度のあいまいさを反映する。彼等は『弾道』と『北緯五十度』との間に強いて芸術にたいする立場と見解の相異をもうけようとする。しかしそれは今日ボルの文学青年輩といえども顧みない、かの自然発生と目的意識の偏見の上に根ざした我田引水式の議論であるに至ってはいささか滑稽である。即ち彼等は「思想から出発して思想のための芸術」と称する怪しげなものを『弾道』の作品に押しつけ、自分らのグループの芸術を称して『詩をつきつめて行つて思想につきあたったところから出発した人間を土台とした芸術』（更科君のハガキ通信による）とまことしやかなことを云っている。そして彼等は両者の何れを芸術として認めるか。彼等にはその決定がない。彼等の芸術に対する態度の自由さ（実はあいまいさ）はこの両者ともこれを芸術として認めざるを得ないのである。何という煮えきらなき、われわれは怒りを感じる。われわれの芸術に対する態度はただ一つあるのみだ。都会と田舎の境遇上の各自の仕事の差異なんでものはすべてこの中に解消すべきものだ。われわれの芸術が芸術としてあるのは、われわれの思想を忠実に宣伝する一つの方法としてあるのではない。思想から出発して思想のための芸術という如き素硬な言葉は芸術の本質はおろか、皮一枚下をもあばき得ない。これこそわれわれの芸術であり詩であるという確証は何によって得ら

れるか。現実の体験をつきつめ、苦悩と心労をつき破つてより強くそれを生かし明日の歓喜を獲得した芸術作品は必ず、われわれの無政府主義のゆく路に沿い、その線に合致する、というこの事実によってその確証は得られるのである」（芸術に関する断片——作品価値論）

彼等——「北緯五十度」の詩人たちや（人道主義に重点のかかりすぎた所謂アナ系の詩人たちが、この論争の結論ともいべき小野の見解をどこまで理解したかはすこぶる疑問である。すくなくともここで言われたこと——アナキズムの文学的主張に二様のものが存在するように考えたこと、そしてその何れかを徹底的に否定しなかった態度は、その何れをも否定し得ない理論の弱さであったばかりか、小野が指摘した「芸術に於ける態度の自由さ即ちアイマイさ」に他ならなかったと理解されることである。つまり私たちはことによると、途方もない者たちを相手にして、それにしては本気になり

すぎた論争ではなかったか、と後になってそう思った。彼等も亦私らも、彼等の農本主義的な正体に気がつかず、「甘い人道主義だ」などと不満げに批評したのは、誰でもなく私自身の内部に、人道主義・農本主義とアナキズムとの重なる部分と区別されねばならない部分とのけじめの、その不十分さを露呈していたことになる。問題は、当時アナキスト詩人などといって存在したグループの、どれもが「北緯五十度」的認識とは五十歩百歩のもので在ったことを知らなかったわれわれの上にこそあった。そしてそれに不満を持ち、最初の論争に向けた私などにまず責任の負うべきものがある。しかし、やや当てずっぽうに近かったその批判に今において回想的意義があったことなど、それに比べては、小野十三郎のすでに「弾道」

時代の理論的明快さは、確然たるものといわざるを得ない、と現在に立つて私にはいうことができる。

ひろくアナ系といわれた詩人達の間にやがて現われた自壊的作用のもつとも早い時期の兆を私たちはこの論争相手のなかに見出しでもよかったのである。一九四三年（昭一八）の献艦『辻詩集』とその翌年の詩集『大東亜』に更科源蔵の「若い漁夫」と「友は征く」がある。われわれの論争の時から十年以上も経っていたが、「北緯五十度」の時期の詩とこの愛国詩とが、イデオロギーの表皮が異なるほどには彼の献身的ポーズは変化がない。都会に対する農村からの反感も殉国のうたも、「おらだは学問ないさけに／むつがすいことは出来ねど／三人分はたつぷりゆくさけ」（若い漁夫と、あの論争の日の理屈きらいや理論無視とこの働く者の誇りは、ある誠実さにおいて、同質であった。無政府主義と戦争嫌いではない愛国心とが、精いっぱい善意に満ちた詩のスタイルに於いて共通している。「古潭よ、燃えろ」を聞いた真壁仁の「農村学校」（『辻詩集』）、「征きてかえらぬ」（『詩集大東亜』）も亦同じ理由においてみすばらしかったのは止むないことであろう。

アナキズムがこのように変貌し得るはずがない。思えば農本主義がべつたりアナキズムと区別不充分だったのは、彼等の善意のはかなさとわれらの無力と至らなさを今もって証するものであった。